

# 英語の照応形と主語指向的照応形 について

---

三 浦 郁 夫

---

## 1. 始めに

これまで言語学において興味の対象となってきたものの一つに、英語の himself や日本語の「自分」のような照応形(anaphor)がある。<sup>1</sup> 照応形は、言語一般に見られることが知られているが、その振る舞いは言語ごとに、また一つの言語内でも異なっている。一つの違いは、照応形の先行詞が現れる領域の違いである。(cf. Wexler and Manzini (1987)) 英語では、その領域は SUBJECT によって定義されるが(cf. Chomsky (1981))、アイスランド語では、最初の直接法(indicative)の節となる。また、日本語の「自分」は、同じ文中に先行詞が存在すればよい。

照応形の言語間及び言語内におけるもう一つの違いは、先行詞となりうる名詞句の文法機能の違いである。日本語の「自分」やアイスランド語の照応形 sig は基本的には主語のみを先行詞とするのに対して、英語の照応形は主語以外も先行詞とできる。<sup>2</sup> 本論では、後者の違いについて論じ、前者については議論の対象外とする。つまり、本論で議論されるのは、(1)-(2)と(3)-(4)のような対比である。

(1) John<sub>i</sub> told Bill<sub>j</sub> about himself<sub>i,j</sub>

(2) a. John<sub>i</sub> said that there was a picture of himself<sub>i</sub> in the post office.  
(Kuno 1987 : 125)

b. Mary heard from John<sub>i</sub> that there was a picture of himself<sub>i</sub> in

the post office.

(ibid. : 126)

(3) 太郎<sub>i</sub> は花子<sub>j</sub> に自分<sub>i/j\*</sub> のことを話した。

(4) 太郎<sub>i</sub> は花子<sub>j</sub> に自分<sub>i/j\*</sub> の書いた絵が賞をとったことを話した。

(1)-(2)で示されるように、英語の照応形は主語以外にも先行詞としてとれる。一方、(3)-(4)で示されるように、日本語の「自分」は主語のみを先行詞とする。この先行詞の違いは、(1)、(3)のように照応形が同一節内で束縛されている場合でも、(2)、(4)のように別の節に先行詞が存在する場合でも同じである。

このような照応形の先行詞の違いは、Pica (1987)、Reinhart and Reuland (1991) などによって、統語的な現象として扱われてきた。しかしながら、後で示すように、そのような統語的分析には問題がある。本論では、照応形の先行詞の言語間の違いは、照応形が直示的に用いられた場合、話者以外を差せるかどうかという語彙的な違いに還元できることを示す。

本論の構成は次のようになる。2節では、Pica と Reinhart and Reuland の統語的接近法を概観し、その問題点を指摘する。3節では、直示的な用法における主語指向的な照応形とそうではない照応形との違いを観察し、その違いによって照応形の先行詞の可能性の違いが説明されると主張する。4節は、結語である。なお、本論の議論は主に英語と日本語に限る。

## 2. 統語的接近法<sup>3</sup>

### 2.1 Pica (1987) による統語的分析の概観

まず、(1)と(3)のように、照応形とその先行詞が同一節内にある場合をみる。Pica (1987) は、主語指向の照応形とそうではない照応形の違いを、LF での移動によって説明している。彼によると、主語指向の照応形は X<sup>0</sup> 要素であり、主要部移動によって屈折要素 I (NFL) に移動する。一方、英語の照応形は XP であり、そのような照応形は I に移動する必要はないと仮定される。<sup>4</sup> (3)のように、照応形とその先行詞が同一節内にある場合、I に付加された照応形は、[Spec, IP] に位置する主語に c 統御される。しかしながら、VP

内(あるいは、構造上 I より下位にある AGRoP 内)の目的語、及び目的語以外の補部には c 統御されない。したがって、(3)の場合には、主語のみが照応形の先行詞となる。それに対して、(1)の場合、照応形は I に移動せず、元の位置にとどまる。したがって、主語だけでなく、目的語にも c 統御されることになる。

(2)、(4)のように照応形とその先行詞が別の節にある場合は、次のように説明される。Pica によると、X<sup>0</sup> 照応形は C (OMP) を通って、上位の I に移動することができる。したがって、(4)において照応形が主節の I に LF で移動すれば、主節の主語にのみ束縛されることになる。<sup>5</sup> 一方、英語の照応形は XP 照応形であり、主節の I に移動することはない。したがって、(2)の照応形は LF においても従属節内にとどまる。(2)の場合、照応形は埋め込み文の主語に含まれているので、その統率範疇は主節にまで広がる。というのは、この場合、埋め込み文の主語は照応形に接近可能な主語にならないからである。(2a)では、照応形が統率範疇内で主語に束縛されており、文法的と正しく予測される。同様に、(2b)では、照応形が統率範疇内で from 句内の NP に束縛されており、文法的と正しく予測される。つまり、Pica の理論によると、英語の照応形が主語以外を先行詞にできるのは、照応形の I への LF 移動がないことから説明される。

Pica の説明の利点は、長距離束縛<sup>6</sup>を許す照応形が、しばしば主語指向的であるという事実を捉えることができることである。次の例が示すように、英語の照応形のような主語以外を先行詞とできる照応形は、長距離束縛を許さないのに対し、日本語の「自分」のような長距離束縛を許す照応形は、主語指向的であるように思われる。

(5) John<sub>i</sub> thinks that Bill<sub>j</sub> loves himself<sub>i/\*j</sub>.

(6) 太郎<sub>i</sub> は花子<sub>j</sub> から [次郎が自分<sub>i/\*j</sub> を愛している] ことを聞いた。

Pica によると、長距離束縛の解釈は、照応形が I に循環的に繰り上がっていくことによって得られる。そして、先に見たように、照応形が I に繰り上がれば、[Spec, IP] にある主語のみが可能な先行詞となる。したがって、長距離束縛の可能性と主語指向性との関連が説明される。

このように、Pica (1987) の理論は、主語指向の照応形と、そのような特徴を示さない照応形の対比を説明するように思われる。しかしながら、次の節では、Pica の説明ではとらえられない照応形に関する事実が存在し、Pica の分析には問題があることを指摘する。

## 2.2 統語的分析の問題点

先に見たように、長距離束縛を LF での I への移動により説明する分析では、その照応形は常に主語を先行詞とすることになる。しかしながら、長距離束縛を許す照応形が、常に主語指向的となるわけではない。英語の照応形は、一般的に長距離束縛を許すことはないとされており、そのような照応形が主語以外を先行詞とすることができるという事実は、一見すると Pica のような分析から導かれる事実であるように思われる。しかしながら、Zribi-Hertz (1989) が指摘するように、実際には英語にも長距離束縛の例が存在する。次の例は、すべて Zribi-Hertz (1989) からの引用である。

- (8) a. (. . .) Slowly, strangely, consciousness changes, and Petworth<sub>i</sub> can feel [the change taking place within himself<sub>i</sub>].
- b. And that was exactly it, he<sub>i</sub> thought, he<sub>i</sub> really didn't care too much what<sub>j</sub> [e<sub>j</sub> happened to himself<sub>i</sub>].
- c. Tell him<sub>i</sub>, please, that we wish him no harm ; but that [it will be better for himself<sub>i</sub> if he goes away from Germany at once].  
(Zribi-Hertz (1989 : 709))
- d. John<sub>i</sub> thinks [that Mary is taller than {him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>}].
- e. John<sub>i</sub> thinks [that Mary is in love with {him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>}, not Peter].
- f. John<sub>i</sub> believes [that letter was sent to {everyone/no one} but {him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>}].<sup>7</sup> (ibid. : 698-699)

これらの例では、角括弧でくまられた部分が統率範疇になる。というのは、その領域には SUBJECT が含まれているからである。したがって、長距離束縛の例であるといえると思われる。英語の照応形は、主語以外を先行詞とすること

ができるので、Pica の分析によると、これらの文は許されないはずである。特に、(8c)のように照応形が目的語を先行詞としている例が存在することは、長距離束縛と主語指向性を結び付けることには問題があることを示している。

Pica (1987) のような統語的分析に対するもう一つの問題点は、(9)のような例の存在である。前節で見たように、日本語の「自分」のような照応形は、普通は主語指向的に用いられる。このことは、Pica (1987) によると、LFにおいてそのような照応形がIに移動すると考えることによって説明された。しかしながら、一般的に主語指向の性質を示す照応形が実際には、目的語を先行詞とすることがある。

(9) a. [自分<sub>i</sub>の絵が賞をとったこと] が太郎<sub>i</sub>を喜ばせた。

b. [花子が自分<sub>i</sub>を愛していること] が太郎<sub>i</sub>を混乱させた。

もし、Pica が主張するように主語指向の照応形がIに移動しなければならないのなら、(9)の例の「自分」も、主節、もしくは従属節のIに移動するはずである。というのは、(3)、(4)の例が示すように、日本語の「自分」は、普通は主語指向的だからである。しかしながら、(9)においては、「自分」がどちらのIに付加されようとも、先行詞に束縛されることはない。したがって、Pica の分析では、(9)のような例は説明できないことになる。

(9)のような例は、Pica (1987) の分析を採用しなければ、Grimshaw (1992) の主題階層 (thematic hierarchy) によって、次のように説明することができるかもしれない。Grimshaw は主題階層として、(10)を仮定している。

(10) (Agent (Experiencer (Goal/Source/Location (Theme))))

(Grimshaw (1992 : 24))

この主題階層を用いると、普通の状態では主語指向的な性質を示す照応形は、次のような一般化に従うと考えることができる。

(11) 照応形の先行詞となるのは、主題階層上もっとも高い要素である。

(9)では先行詞が経験者 (Experiencer) である。そして、主題 (Theme) に含まれる照応形を束縛しているので(11)の一般化に適合する。

しかしながら、次の例は主題階層を用いた分析でも説明できない。

(12) a. 彼<sub>i</sub>の注意深い行動が自分<sub>i</sub>を救った。

b. 彼<sub>i</sub>が花子を殴ったことが、自分<sub>i</sub>の人生に影響を与えた。

これらの例では、照応形が先行詞を含む句と同じ述語の項となっていないにもかかわらず、同一指示が可能である。したがって、主題階層を用いた分析でも問題があることになる。

本節では、主に Pica (1987) による照応形の LF 移動を用いた分析の問題点を指摘した。また、主語指向の照応形とそのような特性を示さない照応形の振る舞いは、主題階層を用いても説明できないことを指摘した。

### 3. 照応形の語彙的特性の違い

前節では、LF 移動によっても、主題階層によっても主語指向的な照応形とそのような特性を持たない照応形の対比を説明できないことを指摘した。(関連する例をここで繰り返す。)

(13) a. John<sub>i</sub> told Bill<sub>j</sub> about himself<sub>i/j</sub>

(14) a. John<sub>i</sub> said that there was a picture of himself<sub>i</sub> in the post office. (Kuno 1987 : 125)

b. Mary heard from John<sub>i</sub> that there was a picture of himself<sub>i</sub> in the post office. (ibid. : 126)

(15) 太郎<sub>i</sub>は花子<sub>j</sub>に自分<sub>i/\*j</sub>のことを話した。

(16) 太郎<sub>i</sub>は花子<sub>j</sub>に自分<sub>i/\*j</sub>の書いた絵が賞をとったことを話した。

本節では、照応形の先行詞のこのような言語間の違いを、次のような対比と結び付けることを提案する。日本語では「自分」は直示的に用いられた場合、話者しか差せないのに対し、英語では照応形が直示的に用いられた場合に、そのような制限がないという対比である。このことは、(17)と(18)の対比に見られる。

(17) a. There were five tourists in the room apart from myself.

b. Physicists like yourself are a godsend.

(Reinhart and Reuland 1993)

(18) 自分のような性格の人間は珍しい。(自分=私/\*あなた)

(17)で示されるように、英語の照応形は直示的に用いられた場合、話し手と聞き手の両方を指せるのに対して、(18)のように日本語の「自分」は話し手のみを指し、聞き手を指示することはできない。<sup>8</sup>

Kuno (1987)によると、話し手が文を発話する場合、その文中の名詞句の視点 (point-of-view, camera angle) から発話される場合がある。Kuno はさらに、この視点は、話し手との同一化がかかっていると主張している。すなわち、文は、話し手が文中のある名詞句になり変わって、発話される場合がある。先に、(18)で「自分」が直示的に用いられた場合、話し手しか指せないとをみた。ここで、この制限が、「自分」の先行詞が文中に存在する場合にも成り立つと仮定しよう。つまり、「自分」は、話し手と同一化された視点のみを先行詞とする。さらに、普通の場合、主語が文の視点となると仮定する。

(15)、(16)の文の主節の主語は有生の名詞句であり、したがって、話し手はその視点をとれる。(18)が示すように日本語の「自分」は、直示的には話し手のみを指す。したがって、(15)、(16)の照応形は、話し手と同一化され、視点となった主語のみを先行詞とでき、それ以外の名詞句を先行詞としてとれないことになる。一方、(17)でみられるように、英語の照応形は、話し手以外の先行詞をとることができるので、話し手と同一化された視点を先行詞としてとる必要はない。したがって、(13)、(14 a)のように、主語を先行詞としてとるだけでなく、(14 b)のように主語以外も照応形の先行詞となることができる。

本節の分析は、(13)-(14)と(15)-(16)の対比を説明できるように思われるが、一見すると、先に見た主節の主語が先行詞となっていない(9)、(12)の例が問題となってくるように思われる。(ここで(9)、(12)を(19)、(20)として繰り返す。)

- (19) a. [自分<sub>i</sub>の絵が賞をとったこと] が太郎<sub>i</sub>を喜ばせた。  
 b. [花子が自分<sub>i</sub>を愛していること] が太郎<sub>i</sub>を混乱させた。
- (20) a. 彼<sub>i</sub>の注意深い行動が自分<sub>i</sub>を救った。  
 b. 彼<sub>i</sub>が花子を殴ったことが、自分<sub>i</sub>の人生に影響を与えた。

しかしながら、これらの例では、主語が有生の名詞句ではなく、主語は話し手と同一化された視点をとることができないと考えられる。この例では、話し手

がその視点をとることができる次に可能な名詞句は、経験者項の、あるいは主語に埋め込まれている有性名詞句であるように思われる。このことが正しいなら、(19)、(20)の照応形は話し手と同一化された視点をもった名詞句を先行詞としていることになる。そして、日本語の「自分」は直示的に用いられた場合、話し手を指すことができるので、(19)、(20)では主節の主語が先行詞となっていないにもかかわらず文法的となると説明される。

本節で主張している、照応形の主語指向性の分析は、主語指向の照応形は常に話し手を指すという仮定に基づいたものである。この仮定は、(21)、(22)の対比から支持される。

(21) The door opened of itself.

(22) a. ??ドアが自分で閉まった。

b. ドアが {独りでに/自然に} 閉まった。<sup>9</sup>

(21)が示しているように、英語の照応形は無生の名詞句を先行詞とできるのに対して、日本語の「自分」が無生の先行詞をとると奇妙な文になる。このことは、次のように説明できる。話し手は無生名詞句と同一化された視点をとるとは考えにくい。したがって、(21)、(22)の場合、話し手が主語と同一化された視点を持っていないと考えられる。「自分」は常に話し手を先行詞としてとるので、(23)では「ドア」を先行詞としてとることができない。一方、英語の照応形は、話し手を先行詞とする必要がないので、(22)のような文が可能になる。

本節では、主語指向性を示す日本語の「自分」と主語以外を先行詞とすることができる英語の照応形の違いについて、それぞれの照応形のもつ語彙的な性質の違いから説明した。この分析は、構造や主題構造を用いた分析にとって問題となる、(19)や(20)の例を説明できるという点で有効であるように思われる。

#### 4. まとめ

本論では、英語のように主語以外を先行詞とすることができる照応形と主語指向性を示す「自分」のような照応形の違いを論じてきた。2節では、主に Pica (1987) のような統語的分析を概観し、その問題点を指摘した。3節では、そ



の様な問題点を受け、これらの言語間の照応形の先行詞の違いは、照応形が話し手のみを指すかどうかによって依存していると主張した。本論の議論は、英語と日本語に限った議論であり、言語普遍的に当てはまるかどうかは、今後の課題としていきたい。

### 注

- 1 本論では、基本的には同一文中に先行詞を必要とする要素を照応形と考える。しかしながら後で示すように、同一文中に先行詞を含まない場合もある。  
また、生成文法では、himselfのような再帰代名詞 (reflexive pronoun) だけでなく相互代名詞 (reciprocal pronoun) も照応形に含まれるが、本論では再帰代名詞にのみに議論を限る。
- 2 主語指向性を示す照応形には、他にもノルウェー語の *seg*、オランダ語の *zich*、ラテン語の *se*、中国語の *ziji* などがある。Hellen (1991)、Reuland and Koster (1991)、Tang (1989)、Thrainsson (1991) などを参照。
- 3 本節では、統語的分析の代表として Pica (1987) を見る。Reinhart and Reuland (1991) も Pica と同じように、照応形の LF 移動により、照応形の言語間の違いを説明する。その説明は、細かいところでは Pica とは異なるが、問題点はまったく同じである。
- 4 Pica (1987) によると、 $X^0$  照応形と XP 照応形の LF 移動の違いは、先行詞統率から導かれる。Pica は照応形は先行詞によって、先行詞統率されなければならないと仮定している。つまり、 $X^0$  照応形は I の位置に動くことによるのみ先行詞統率されるのにたいして、XP 照応形は先行詞統率されるために I に動く必要はないと仮定される。詳しい議論に関しては、Pica (1987: 492) 参照。
- 5 (4) の場合、照応形が従属節の I に付加されると、統率範囲は主節に広がる可能性がある。というのは、Chomsky (1981) の統率範囲の定義 (i) では、(4) の場合、照応形に接近可能な SUBJECT は従属節の主語ではなく、主節の主語であるからである。  
(i)  $\beta$  is a governing category for  $\alpha$  iff  $\beta$  is the minimal category containing  $\alpha$ , a governor of  $\alpha$ , and a SUBJECT accessible to  $\alpha$ .  
このような場合、(4) の照応形はその統率範囲内で主語ではない「花子」に束縛されることになり、(4) の解釈を正しく導けない。しかしながら、(4) の場合、

照応形が従属節の I に付加されるとは考えにくい。というのは、そのような移動は、従属節の [Spec, IP] から従属節の I への繰り下げを含んでいるからである。また、(ii) のように従属節の I に照応形が付加できる場合、従属節の主語が接近可能な SUBJECT になり、統率範疇は従属節になる。

(ii) 太郎<sub>i</sub> は花子<sub>j</sub> から [次郎が自分<sub>i/m</sub>] を愛していることを聞いた]。

したがって、(ii) の照応形が従属節の I に繰り上がった場合、主節の要素が先行詞となることはできない。(ii) の照応形が主節の要素を先行詞とできるのは、主節の I に付加された場合のみであり、この場合 [Spec, IP] にある「太郎」のみが自分を束縛することになる。したがって、(ii) の例においても、「自分」が主語のみを先行詞とすることが説明される。

- <sup>6</sup> 本論では議論しないが、照応形の長距離束縛は、意味的に限られた環境に現われる。詳しい議論については、Kuno (1987)、Sells (1987) などを参照。
- <sup>7</sup> (8 d-f) の例は、照応形が強調表現として用いられている。強調表現の照応形はしばしば束縛原理には従わないとされており、(8 a-c) の照応形とは別の扱いをするべきかもしれない。しかしながら、Zribi-Hertz (1989) は、強調の照応形の使用も、強調表現と用いられていない照応形と基本的には同じ条件に従っていることを示している。
- <sup>8</sup> 日本語だけではなく、主語指向性を示す韓国語についても同じことが当てはまる。そのような観察については、名古屋大学英語学研究室 4 年の奉絃京さんに感謝する。

日本語の「自分」の場合、関西方面の話者は、「自分」を聞き手を指す場合にも用いるようである。本論では、このような用法の「自分」は、照応形ではなく、単なる 2 人称の代名詞であると考ええる。

「自分」が話し手のみを指すという本論の一般化の別の反例は、次のような例である。

(i) 自分でやりなさい。

この例の「自分」は、明らかに聞き手を指している。しかしながら、この例は命令文であり、音形を持たないが 2 人称の主語を持っていると思われる。したがって、(i) の例の「自分」は、直示的な用法ではない。

- <sup>9</sup> (22 a) のような文を容認する日本語の話者もいるが、そのような話者にとっても (22 a) より (22 b) の方が自然であるという判断がなされるようである。ここでは、そのような話者にとっては、(22 a) の「ドア」が擬人的に用いられていると考える。

## 参考文献

- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language*, Praeger, New York.
- Hellen, L. (1991) "Containment and Connectedness Anaphors," in J. Koster and E. Reuland ed., *Long-Distance Anaphora*, Cambridge University Press, New York.
- Kuno, S. (1987) *Functional Syntax : Anaphora, Discourse and Empathy*, Chicago University Press, Chicago.
- Pica, P. (1987) "On the Nature of the Reflexivation Cycle," *NELS* 17, 483-499.
- Reinhart, T. and E. Reuland (1991) "Anaphors and Logophors : an Argument Structure Perspective," in J. Koster and E. Reuland ed., *Long-Distance Anaphora*, Cambridge University Press, New York.
- Reuland, E. and J. Koster (1991) "Long-Distance Anaphora : an Overview," in J. Koster and E. Reuland ed., *Long-Distance Anaphora*, Cambridge University Press, New York.
- Sells, P. (1987) "Aspects of Logophoricity," *Linguistic Inquiry* 18, 445-479.
- Tang, C. -C. Jane (1989) "Chinese Reflexive," *Natural Language and Linguistic Theory* 7, 93-121.
- Thrainsson, H. (1991) "Long-Distance Reflexives and the Typology of NPs," in J. Koster and E. Reuland ed., *Long-Distance Anaphora*, Cambridge University Press, New York.
- Zribi-Hertz, A. (1989) "Anaphor Binding and Narrative Point of View : English Reflexive Pronouns in Sentence and Discourse," *Language* 65, 695-727.

## Synopsis

## On the English Anaphor and Subject Oriented Anaphors

By Ikuo Miura

The aim of this paper is to explain difference between English anaphor *self* and Japanese anaphor *zibun*. These anaphors exhibit different behavior in selection of their antecedents, as shown in (1) and (2):

- (1) John<sub>i</sub> told Bill<sub>j</sub> about himself<sub>i/j</sub>  
 (2) Taro<sub>i</sub>-ha Hanako<sub>j</sub>-ni zibun<sub>i/\*j</sub>-no koto-wo hanashita  
 'Taro told to Mary that his picture won a prize.'

These examples show that an English anaphor takes either a subject or other grammatical functions as its antecedent, while Japanese anaphor *zibun* takes only a subject ; that is, *zibun* is subject-oriented. Pica (1987) and Reinhart and Reuland (1991) explain this difference by assuming that subject-oriented anaphors are X<sup>0</sup> anaphor, while non-subject-oriented anaphors are XP-anaphor. In this assumption, X<sup>0</sup>-anaphors must move to INFL, hence bound only by subjects in [Spec, IP]. On the other hand, XP-anaphors need not move, so they can be bound grammatical functions other than subjects.

In this paper, I point out that there are some examples that cannot be explained by such syntactic approaches. One such instance is the following sentence :

- (3) [zibun<sub>i</sub>-no e-ga nyuushoushita]-koto-ga Taro<sub>i</sub>-wo yorokobaseta  
 'That his picture won a prize delighted Taro.'

In this sentence, *zibun*, which is normally subject-oriented, takes the object *Taro* as its antecedent, although it cannot adjoined to the I, where it is bound by the antecedent. Thus, it follows that we cannot support the LF-movement approach to subject-oriented anaphors.

Alternatively, I claim that the contrast between (1) and (2) is related to other contrasts like (4) and (5) :

- (4) a. There were five tourists in the room apart from myself.  
 b. Physicists like yourself are a godsend.

(Reinhart and Reuland 1993 : 669)

- (5) *zibun-no youna seikaku-ha mezurashii*

(*zibun*=the speaker/\*the hearer)

‘Character like myself is rare.’

These sentences suggest that Japanese anaphor *zibun* refers only to the speaker, while English anaphors do not have this restriction, when they are used deictically. This paper claims that Japanese anaphor *zibun* is always takes as an antecedent the NP whose camera angle the speaker takes. Furthermore, I claim that the speaker takes the camera angle of the subject, if it is possible. As shown in (5), *zibun* refers only to the speaker, when used deictically. Under these assumptions, *zibun* in (2) only refers to the subject, because the speaker can only take the camera angle of the subject, and *zibun* refers to the speaker, when used deictically. On the other hand, if English anaphors do not have such a property, it would be correctly predicted that they take both the subject and object as their antecedent freely.